

根本説一切有部における

帰依三宝について

佐々木教悟

—

義浄 (AD. 635~715) の撰になる「南海寄帰内法伝」(四卷)は、その序にかれ自身が

凡此所論皆依根本説一切有部。

とのべていることから知られるごとく、根本説一切有部 (Mulasarvastivadin) という一派に依って論述されたものである。その根本有部 (以下、根本説一切有部の略称としてこれを用いる) は、義浄によれば、その当時、インドおよび南海諸地域におこなわれていた四部 (聖大衆部 *Ārya-Mahāsāṅghika*, 聖上座部 *Ārya-Sthavira*, 聖根本説一切有部 *Ārya-Mulasarvastivadin*, 聖正量部 *Ārya-Sammatīya*) の中の一部派であり、また有部より分出したとする法護部 (*Dharmaguptaka*)、化地部 (*Mahīśāsaka*)、迦提卑部 (*Kāśyāpiya*) などが、インドなどにはおこなわれずして、烏長那国 (*Uddiyāna*) および亀茲 (*Kuci*)、干闥 (*Khotan*) に雑え行なわれていたが、根本有部はそれらとも異なるものであり、さらにその律は有部の伝持せる十誦律とおおむね似てはいるが、細部にわたってはちがっているもの

であることが知られる。もちろんこの他に、その当時、インドおよび南海諸地域に大乘がおこなわれていたことはいうまでもない。その大乘は中観、瑜伽の二種をいでなかったとするが、義浄の大乘に関する定義は

若礼菩薩・読大乘經・名之為大。不行斯事・号之為小。

というのであるから、厳密に言えば、大乘小乗の区分定^{さだ}かならざるものがあつたといふことができる。

ところで、ここに注目すべきは義浄がもっぱら依拠したといわれる根本有部なる部派の性格である。有部と根本有部との関係については、すでに学者によって言語の変遷の上から、あるいは主として伝記文学の上から、あるいはまた主として分派の系譜の上から、両者の本末関係が論ぜられていて、それらの諸説はいずれも参考に値するものである。しかしながら、それらの研究によって、すべての疑問が解消したわけではない。これらの研究には、まだチベット訳の文献が渉獵されていないために、何故にチベットにおける律が根本有部律のみとなっているのか、そのような問題には関心を示さない。たとえば、根本有部はマトゥラー(Mathura)を中心とした後期の展開であるとしても、根本有部の持律師にしてカシミール(Kashmir)の地で活動した人が多いが、これをいかに理解したらよいのか、そのような点についても未審のままである。いずれにしても根本有部のすぐれた律僧であつたマトゥラー出身のグナプラバ(Gunaprabha徳光)^④と、かれのヴィナヤストラ(Vinayasūtra 律經)の系統をあきらかにすることがのぞまれるのである。

註① Lin Li-kouang: Introduction au Compendium de la Loi, paris 1949, pp. 198-201.

② 岩本裕「Sarvāstivādin 及 Mūlasarvāstivādin——Śrīgākotikaraṇa の伝記をテーマとして——」干潟博士古稀記念論文集

③ 塚本啓祥「初期佛教教団史の研究」四四七頁——

④ 拙稿「ハルシヤ王の治世におけるマトゥラー佛教の動向」印佛研五の一

さて、根本有部律については、梵文資料、漢訳資料、チベット訳資料など豊富な文献が現存し、しかも『寄帰伝』のごとき、律の実際の運用面を記録した文献が存していて、その部派の性格を究明するにはきわめて好都合である。梵文はすくなくとも五種あり、漢訳はすべて義浄の翻訳になるもので、経録の上からいえば一八部二〇六巻を数え、現存するものでいえば一八部一九九巻を数えることができる。チベット訳は「北京版西藏大蔵経」でいえば、甘殊爾に八部、丹殊爾に四五部が収載せられている。これらの梵漢蔵三本のあいだのおおよその比定は、学者によってすでにおこなわれているが、^①厳密な対照研究はまだおこなわれていないといつてよい。しかしながら、その内容を一々点検しての研究は、すでに発表されている大谷大学の「大谷大学図書館蔵西藏大蔵経甘殊爾勘同目録」(全三冊)と、現在発表されつつある同じく「大谷大学図書館蔵西藏大蔵経丹殊爾勘同目録」(第一分冊一九六五年刊)が果たすものと期待される。とくにチベット訳には、それぞれの末尾に奥書(colophon)がつけられてあり、そこには造者、訳者、校閲者もしくは刊定者などの名があげられるとともに、翻訳の年時あるいはその場合、さらに翻訳の際の諸事情などがある。またあるものがあつて、訳経史上において貴重な資料を提供するものといつてよい。こころみにさきに一言した徳光律師の著作になるもののうち、律に関するものの奥書をあげてみるならば、つぎのごとくである。

西藏大蔵経のなか徳光の造とされているものは、およそ七部(No. 5545, 5546, 5568, 5619, 5620, 5621, 5624)であるが、そのなか、No. 5545は「菩薩地註」、No. 5546は「菩薩戒品疏」、No. 5568は「五蘊詳釈」にして、まわしく律に関するものは、つぎの四部である。

No. 5619 Hdul-bahi mdo Vinayasutra 律經

聖根本説一切有部の持律師「婆羅門の阿闍梨尊者 Yon-tan hod(Gunaprabha)造。妙自在主 Dpal Lha-btsan-

po の勅命によって聖根本説一切有部の持律師にしてカシミールの毘婆沙師なる Jinamitra と大校修訳官大徳

Kluhi rgyal-mtshan とが訳、閲、刊定した。

(Zu 1, 1-109 b^s 二七〇〇の偈頌よりなり、九章に分かれている。漢文目録題名「定律本經」)

No. 5620 Las brya-rtsa-gcig-pa Ekottarakarma-sataka 百一羯磨

奥書は No. 5619 と全同

(Zu 2. 109 b^s-298a^s 三七〇〇の偈頌よりなり、九章に分かれている。漢文目録の題名「律儀手受刊定百一羯磨」、これは義淨訳「根本説一切有部百一羯磨」十巻に比定されるものである)

No. 5621 Hdal-pa ndo-hi hgral-pa mñon-par brjod-pa ran-gi mnam-par bsad-pa shes-bya-ba Vinayasūtra-vṛtti abhidhana-svavyākhyāna-nama 律經註現説自解説

マラーマール国の聖根本説一切有部の Mahāvādakarsabha など阿闍梨 Yon-tan hod (Gunaprabha) 造。

これは王中の王 Śrī Śiladityadeva (Harṣavaradhana) が広大な領土を支配して王位に上った年に、Dpal Sīnā の大伽藍において書写された。インドの親教師班抵達 Alaṅkādeya と大校修訳官 Tshul-khrims hbyun-gnas sbas-pa の二名が Sgye-hu-ri の麓の Chos-skor dben-tsha の伽藍において訳した。

(Hu 1-328 a^s, Yu 1-342 a^s これは No. 5619 の自註について一四、〇〇〇頌よりなる。漢文目録題名は「毘尼經解自演」となっている。なお奥書にちやうに附加された奥書があり、そのには Vinayasūtravṛtti Mādhurī nāma 律經註摩頭羅所屬と名づけられている。その「と」は「な」の誤りである)

No. 5624 Hdal-bahi hgral-pa Vinayasūtra-vṛtti 律經註

多聞について有徳の阿闍梨 Yon-tan-gyi hod thams-cad yod-par smra-ba-pa (Sarvāstivādagunaprabha) 造。

訳者欠

(Su. 1-429 a^s 漢文目録題名は「毘尼經小疏光明徳」となっている。これはチベット目録にも徳光に帰せられてはいるが、

上掲の奥書とは、すこしその書き方を異にしており、漢文目録は番本なりやを疑っている)

「西域」卷五ならびに「慈恩伝」卷五の記述によれば、カナウジ (Kanaui) とターネサル (Thaneswar) の王にして、インドの中原に君臨し、一時は西インド全体をも支配した戒日王 (Siladitya) すなわちハルシャ王 (Harṣa-vardhana AD. 606~646) は無遮大会 (五年大会 Pañca-varṣika-pariśad) を催し、自ら佛教のおしえを聴聞した人であったが、ターラナータの「インド佛教史」によれば、かれが師匠として敬った阿闍梨は、前述の徳光であったといっている。その点はバーナ (Bāṇa) のハルシャチャリタ (Harṣacarita ハルシャ王行伝) によっても明かでないが、前掲の No. 5621 の奥書が傍証となるものといつてよからう。ハルシャ王が初めはシヴァやスーリヤを崇拜するヒンドゥ教徒であったが、その晩年において熱心な佛教徒であったことは、自作の詩としてかれに帰せられている「晨朝讃」(Suprataprabhata-stotra Otani No. 2056) ならびに「八大靈塔梵讃」(Aṣṭamahasthanacaitya-vandanastava, Otani No. 2057) なる讃頌などが存することによつても知られる。またハルシャ王の兄のラージュヤヴァルダナ (Rājyavardhana) も、妹のラージュヤシュリー (Rājyaśrī) も、ともに佛教徒であったといわれ、とくに妹は正量部の教義に善く通じていたとされている。一説には王自身は大乘佛教を信仰したといわれているが、それは観世音菩薩を礼拝したり、中国の玄奘三蔵を大乘僧として厚く遇したという行為などによつての見解とみられる。しかしながら、徳光を師匠としたということが事実であったとするならば、王はおそらく根本有部のおしえを通して佛教の感化影響を受けたものとかんがえられる。のちにも閑説するごとく、根本有部の立場はあくまで経律儀軌を尊重しつつも形式にとらわれず、現実 に即して精神を生かそうとするものにして、讃佛乘 (Sōtrayāna) の影響を受けており、ある面ではきわめて大乘に近いものがあるとみられるふしがある。

いづれにしても七世紀ころのインドにおいて、ハルシャ王の支配地域に根本有部は行なわれていたのであり、その根本有部の律は、北方のカシミールにも普及し、さらにネパールにおいても、またトカラにおいても伝持されたこ

とを知るのである。

ところで、ちょうどこの時期に義浄は律を求めてインドに旅行したのであるから、かれが入手した律が根本有部律であったことは当然のことであった。義浄によれば、根本有部はその当時マカダ地方では他の三部に比してもっともよくおこなわれており、北インドにあっても大半の僧伽がこの部派に属していたという。また東インドでは他の三部と雑え行なわれており、さらに南海諸洲にあっても、一部には大乘佛教がおこなわれていたが、大部分がこの部派で占められていたことをのべている。おそらく七世紀の後半ごろは、カシミール、ネパールをふくむインド全域から南アジア一帯にかけてこの部派が風靡して、義浄はその旅行のさきさきで実際にその模様を見聞し、かつその止宿せる諸寺においてその律を熱心に学んだのであろう。「寄帰伝」はそのことをおもわしめずにはおかぬ記録である。おそらくこの記録には根本有部の特色とみなされるものがふくまれているに相違ない。この観点から、それに該当するとおもわれるものを若干とりあげてみたい。

註① 平川彰「律蔵の研究」六八頁以下

② 西域記卷五、大正五一、八九五中

③ 慈恩伝卷五、大正五〇、二四六上―

④ 寺本婉雅訳註「タールナータ印度佛教史」一九四頁

⑤ 慈恩伝卷五、大正五〇、二四七中、Sylvain Lévi: L'Inde civilisatrice p. 218.

⑥ Sachchidananda, Bhattacharya: A Dictionary of Indian History, p. 410.

⑦ 拙著「南海寄帰伝講要」一七頁以下

三

(一) 從「那爛陀」東行五百駅。皆名「東裔」。乃至「尽窮」有「大黒山」。計当「土藩南畔」。伝云是触川西南。行可「一月余」

便達^ス斯嶺^ス。次此南畔。逼^ス近海涯^ス。有^ス室利察咀羅國^ス。次東南有^ス郎迦戌國^ス。次東有^ス社和鉢底國^ス。次東極至^ス臨邑國^ス。並悉極遵^ス三宝^ス。多有^ス持戒之人^ス。乞食杜多是其國法^ス。西方見有^ス実異^ス常倫^ス。(序、大正五四、二〇五、中、八、割註) この割註はナールンダより東の辺境の諸國として、順次に室利察咀羅國 (Śrīkṣetra ビルマの Irrawaddy 河中流の Old Prome)、郎迦戌國 (狼牙脩 Langkasuka プラヤの東海岸 Patani 附近、ときには西海岸 Kedah 地方をふくめていう)、社和鉢底國 (Dvāravātī タイの Me-nam 河下流の Ayudhyā から Nakon-Pathom にかけての地)、臨邑國 (Champa 南メトナムの南東岸) をあげ、これらの諸國には、大衆、上座、根本有部、正量の四部がまじえ行なわれていたことをのべ、そしてそれらの諸國の住民はことごとく三宝を敬い、持戒の人多く、また出家としては行乞をなし、杜多 (頭陀支 dhutanga) を行ずることが、その國のならいであつた。これに似たことはインドにも見られたが、東南アジア諸國の模様は有りふれた仕方とは異なつていたことをのべたものである。ところで、この三宝に遵うということに關して、「寄歸伝」においてまさしく三宝なる語を用いているところは、この他に五ヶ所存する。

(一) 号曰^ス莫訶哥羅^ス。即大黒神也。古代相承云。是大天之部属。性愛^ス三宝^ス。護^ス持五衆^ス。使^ス無^ス損耗^ス。(九受齋軌則、二〇九、中、二三)

これはインドの諸大寺において、食厨の柱側に、あるいは大庫の門前に木彫の大黒天 (Mahakāla) が祀られてゐることをのべたもので、それはかの大黒神が三宝を愛し、出家の五衆を護持するという性質を有するからであるとしている。

(二) 佛言。有^ス二種^ス。応^ス礼^ス。所謂三宝及大已苾芻。(三十三尊敬乘式、二二八、上、二五)

ここにいう大已苾芻とは、先受戒者のことで、法臘の上なる比丘のことである。

(四) 徼信^ス三宝^ス。諦想^ス二空^ス。(三十四西方学法、二二九、上、二二)

これは文法学者伐掇呵利 (Bhartrhari 五世紀後半) の徳を称揚してのべるところに出てくる文である。

(五) 仰蒙三宝之遠被。(三十四西方学法、二二九、下、二四)

これは義浄が三宝の冥護のもとに、インドの佛蹟を巡拝し得た喜びをあらわしつつ、自らの行履をのべるところに出てくる文である。

(六) 汝可務紹隆三宝令使不絶莫縦心於百氏而虚棄一生。(四十古徳不為、二二三、上、一二)

これは義浄の軌範師であつた慧習禪師の励ましのことばとしてあげたものである。

以上、あげたごとき三宝なる語は、義浄の訳出なる「根本説一切有部毘奈耶棄事」巻一(大正二四、三中、二九行)には「敬信三宝」として、また同じく「根本説一切有部毘奈耶破僧事」巻一一(大正二四、一五七下、二五行)には「帰依三宝」としてあげられてあり、また同じく「根本説一切有部毘奈耶雜事」巻一六(大正二四、二七七、下、三行)にも「帰依三宝受持五戒」としてあげられている。そしてこのような用語は、上述せる箇所以外にも屢々用いられている。さらにまたそれは根本有部律以外の他律にも、ほぼ同様に用いられている。すなわち、三宝は原始經典以来の *ratana* たる訳語として通用しているからである。「帰依三宝」もしくは「三宝供養」等の語は随処に見られるといつても過言ではない。^①これを遊歴伝で拾うならば、「法顯伝」摩揭陀国の条には「三宝信重」^②とあり、「西域記」巻一、巻三には「三宝崇敬」とある。ところでかような三宝崇敬は三宝に対する礼讃というかたちで、きわめて顕著に普及せしめていった一つの流れを認めることができる。すなわち紀元二世紀ごろに活動したアッシュヴァゴーシャ (Asvaghosa 馬鳴)^④を祖とする讃佛乗派の系統である。この派に属するマトリチェータ (Matriceta 摩呬里制吒) に於て「三宝讃」(Dkon-mchog gsum-la bstod-pa, *Triratnamangala-stotra*, Otani No. 2035) をよむ「三宝吉祥讃」(Dkon-mchog gsum-la bkra-sis-kyi bstod-pa, *Triratnamangala-stotra*, Otani No. 2030) の作品があり、前者に対してはジナプトラ (Jinaputra) による注釈 (Otani No. 2036) も存する。また「三宝讃」に関しては、なおこの他にヴァ

スバンドック (Yasubandhu 世親) に帰せられているものも存在している (Otani No. 2037)。かような讃頌文学の出現は、帰依三宝ないしは三宝供養の思想を一層さかんならしめる一つの要因になったのでないかとかんがえられる。^⑤

おもうに前掲のごとく「寄帰伝」に、「並悉極遵三宝」とその当時の模様をのべるその背景には、讃佛乗派の影響があつたとみることはできないであろうか。

註① 水野弘元編「南伝大藏経総索引」第一部上巻一七五頁、三二六頁

② 法顯伝、大正五一。八六五下

③ 西域記巻一大正五一、八七〇上、同巻三、大正五一、八八六中

④ 拙稿「クシャーナ時代における佛教の一考察」大谷大学研究年報第十集、一八五頁以下

⑤ 奈良康明「佛教詩人マートリチェータの思想的立場」印佛研二一一参照。cf. D. R. Shackleton Bailey: The Śatapatha-śāstra of Maitreya, Introduction p. 3.

四

さて「寄帰伝」にあつては、上にあげた三宝なる語にかえて三尊の語を用いて、三尊に対する敬い、三尊に対する帰依ということ、のべている点がとくに注意される。

(一) 四儀無累三尊是親。(十八便利之事、二一八、下、二九)

「解纜鈔」巻五によれば、「三尊三宝。可尊故名。」とのべている。すなわち、身根静まり、心淨かなれば、行住坐臥の四威儀がみだされることなく、つねに三宝が親しまれることになるという意味である。

(二) 詳夫修敬之本無越三尊。契想之因寧過四諦。(三十一灌沐尊儀、二二六、中、一一)

「解纜鈔」巻六によれば、「標三宝発端也」といい、契想とは観慧を意味するとなす。おそらくこの文章の背後には、かの「葉事」巻八に^①

爾時婆羅門既聞、是已。生信敬心。世尊知彼意樂隨眠。應機為說「四聖諦法」。広説如前。無始積集薩迦耶見。

以「智慧杵」而摧「破之」。現「証初果」。唱言。我入「預流」。我今尽「寿」歸「依佛法僧宝」。受「五学处」。為「鄔波索迦」。
とのべるごとき文意が伏在するものとおもわれる。

(三) 所誦之經多誦三啓。乃是尊者馬鳴之所集置。初可十頌許。取經意而讀歎三尊。(三十二讚詠之礼、二二七、上、一三)

これはかの「佛所行伝」(Buddhacarita)なる佛伝の造者として名高いアシュヴァゴーシャ長老が集め置いたという「三啓経」^②の初段に三宝に対する讃歎がなされていることをのべたものである。この「讃詠之礼」の章に対してフランス語訳があるが、それによれば、^③ 三尊を Trois Bienheureux と訳して、その註記に Amitabha (弥陀) Avalokiteśvara (観音) Mañjuśrī (勢至) としている。しかしながら、たといそのような意味として Cowell によって引用されているとしても (S. B. E., Vol. Xlix, P. ix)、「寄歸伝」の英訳者が指摘することく^④、この三尊が三宝を意味していることは明白である。すなわち、「根本説一切有部百一羯磨」巻一には

阿遮利耶存念。我某甲始終今日。乃至命存。歸依佛陀兩足中尊。歸依達摩離欲中尊。歸依僧伽諸衆中尊。とあり、その対応チベット訳なる Las brya-rtsa gcig-pa^⑤ (Ekottarakarmasataka) には

btun-pa dgeṅs-su gsol | bdag min ḥdi shes bgyi-ba dus ḥdi nas bzun ste ji srid ḥtsheḥi bar-du | rkaṅ-gñis-rnams-kyi mchog saṅs-rgyas-la skyabs-su mchīho || ḥdod-chags dan bral-ba-rnams-kyi mchog chos-la skyabs-su mchīho || tshogs-rnams-kyi mchog dge-ḥdan-la skyabs-su mchīho |

とあって一致している。

ところで、かの根本説一切有部系統の梵文資料といわれている「翻訳名義大集」(Mahāvīrutpatī) には^⑥ 三帰依 (Tri-ṣaṇaṅgamanam Skyabs-gsum-du ḥgro-bahi min-la) として Buddhāṃ ṣaṇaṇāṃ gacchāmi divipādānam

agryam (帰依佛陀両足尊); Dharmam garanam gacchami virāṅgam agryam (帰依達摩離欲中尊); Saṃgham garanam gacchami gāṇanam agryam (帰依僧伽衆中尊)とあって、上掲チベット訳のイタリックにて示せるものと一致している。ただわずかに*印を付せる部分 *bral-ba-rnams-kyi* が *bral-bahi* に *tsogs-rnams-kyi* が *tsogs-kyi* になっているのみである。この中、両足尊に関しては、「薬事」巻八に「刹利承嫡者両足中最尊 明行具円満 得在天上」^⑨とあるごとく、明 (*vidyā*) と行 (*caranā*) とを具足せる (*sampanna*) ものは最尊であり、それは佛陀に他ならぬのである。また離欲に関しても、同じく「薬事」巻一五に「聞佛心離欲 広説醉象縁厭離貧欲習 因発菩提心」^⑩であるごとく、離欲 (*virāga*) の徳用を具有するものが正法であり、さらにその正法を修得する僧伽も「福田功最勝」^⑪なるものである。そこで「正信三宝尊」^⑫なる語も用いられることになる。

尚、英訳は註記において *Dīpaṇṣa XI, 35* のフシ「カ王の言葉なる *Buddho dakkhiṇeyyāṇ' aggo, Dhammo aggo virāṇam/Saṃgho ca puṇākkhettaggo, tīni aggā sadevake//*」をあげて、そこに同一の思想のみられることをのべている。^⑬

(四) 先令敬信三尊、孝養父母。(三十二讃詠之礼、二二七、下、一七)

「解纜鈔」巻六(四六四)によれば、「先令言示入道初要故云、先。使彼勿無他意故云敬信三尊。三帰是入道之要、諸戒之基本。」とのべているが、ここにいる先とは、直前にあげる龍樹の「密友書」の最初に三宝に帰依することがあげられていることを指すのである。また大正藏経が校訂して孝養父母となすのは、むしろ宋、元、明三本のごとく供養父母となすのが適当とかがえられる。「解纜鈔」は「供養父母世間最勝之福。」とのべている。

(四) 敬重三尊、多營福業。(三十四西方学法、二二九、上、一)

これは *Pāṇini* の *Sūtra* に対する注釈 *Kaśikavṛtti* を造った文典家ジャヤディトヤ (*Jayaditya* 闍耶眈底) が、
たんなる学者ではなく、敬虔な信仰の人でもあったことをのべるものである。

(内) 尽形寿、以要心、歸敬三尊。契涅槃而近想。斯其次也。(三十五長髮有無、二三〇、上、一五)

出家して具足戒を所持するものを上とするが、在家生活をなしつつも八戒を所持するもののありかたをのべ、それはその次に位すべきものでまた佳であるといっている。

以上が「寄歸伝」において三宝ならびに三尊の語を用いている箇處であるが、英訳者は七回のうち二回を除いて五回は三尊を用いているというが、仔細に点検すれば、上の如く一回のうち、三宝が五回、三尊は六回となっている。このような事実は、歸依三宝の思想が風靡していたことを物語るものであるが、三尊なる語がすでに早くより他においても用いられていたとしても、とくに歸依佛陀兩足中尊などのかたちであげられるのは、根本有部の特色でなかったかとおもわれる。そしてその三尊に対する歸依の意味は、「雜事」卷二六のつぎのごとき偈頌によって明らかにされているとかんがえられる。

衆人怖所逼 多歸依諸山

園苑及樹林 制底深叢處

此歸依非勝 此歸依非尊

不因此歸依 能解脫衆苦

諸有歸依佛 及歸依法僧

於四聖諦中 恒以慧觀察

知苦知苦集 知永超衆苦

知八支聖道 趣安隱涅槃

此歸依最勝 此歸依最尊

必因此歸依 能解脫衆苦

註① 根本説一切有部毘奈耶藥事卷八、大正二四、三六下—三七上

② 根本薩婆多部律撰卷七、大正二四、五六七、中、下、根本説一切有部毘奈耶雜事卷四、大正二四、二三三中、同卷一八、大正二四、二八七上、西本龍山「四分律比丘戒本講讀」九九頁、平川彰「律藏の研究」七八〇頁

③ Deux chapitres extraits des Mémoires d'I-Tsing sur son voyage dans l'Inde par M. Ryauon Fujishima, J. A. Huitième série Tome XII, 1888, p. 417.

④ A Record of The Buddhist Religion as practised in India and the Malay Archipelago (A.D. 671-695) by I-Tsing, transl. J. Takakusu, p. 160.

⑤ 根本説一切有部百一羯磨卷一、大正二四、四五六上、四行目、同中一六行目、四五九下二五行目にも同文あり。

⑥ Otani No. 5620, Zu, 111 b, l. 2, 113 a, l. 5, 113 b, l. 3

⑦ 平川彰「律藏の研究」九八頁

⑧ 梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集、五五八頁—九頁 § CCLXI. 8688, 8689, 8690, 8691

⑨ 根本説一切有部毘奈耶藥事卷八、大正二四、三四下

⑩ 前同卷一五、大正二四、七三下。この離欲に關しては、「黃赤比丘事」にその説明がある。Paṇḍulohitakavastu (Gilgit Manuscripts Vol. III, Part 3, p. 54)

⑪ 前同卷一一、大正二四、五二下 ⑫ 前同卷一五、大正二四、七三下

⑬ A Record of the Buddhist Religion, p. 161 f.

⑭ op. cit., p. 160 f.

⑮ 「自歸三尊」。最吉最上。唯独有是度一切苦。」法救撰、吳維祇難等訳「法句経」一九二偈

⑯ 根本説一切有部毘奈耶雜事卷二六、大正二四、三三三上

五

義淨は「三十二讃詠之礼」において、その当時のインドおよび南海の地において、僧徒たちが盛に讃詠を行なっていた旨をのべているが、その讃詠とは佛徳を讃歎した偈頌、あるいは三尊の徳を讃歎した偈頌を高声にて節をつけて唱えることである。

元来、佛教の僧伽にあつては、比丘や沙弥自身が歌唱をなすことを禁じていた。^①しかしながら、布薩の際に長者たちに比丘が歌詠の声で説法することは許されていた。許されてはいたが、過差なる歌詠の声にて行なうことはかたくいましめられた。すなわち、過度なる歌詠の声にて説法を行なうならば、次の如き五つの過失があるといわれる。

(一) 便自生_レ貪著_二愛_一樂音声_一。

(二) 其有_レ聞者生_二貪著_一愛_二樂其声_一。

(三) 其有_レ聞者令_二其習学_一。

(四) 諸長者。聞皆共譏嫌言。我等所習歌詠声。比丘亦如是説法。便生_二慢心_一不_二恭敬_一。

(五) 若在_二寂靜之處_一思惟_二緣憶_一音声_一以乱_二禪定_一。^②

たとい説法をなす際であつても、かような過失があげられていましめられたとすると、誦經の際にもおのずから消極的となつて「不閑声韻」とならざるをえないであろう。しかるに、根本有部にあつては、つとめて讃詠が行なわれていたというのは、いかなる根拠によるのであろうか。この点については、「雜事」卷四^③の記述が、その説明をなすものとおもわれる。すなわち、あるとき給孤独長者 (Anathapindika) が路傍で諸外道が誦經している声を聞くに、吟詠の声調で音詞愛すべきものがあり、佛教の諸聖衆が声韻を閑_なわすして句を逐い文に随う誦經の仕方が、さながら瀉聚して之を異器に置くような調子であるのとくらべて深く感ずるところがあつた。そこで世尊にその旨を申しあげ、諸聖衆も吟詠の声を作して經典を誦誦することの聴許をこつた。そこで世尊は默然としてこれを聴_きしたもうたというのである。しかるに、そのことがあつてから説經から請教白事にいたるまで吟詠の声でなされるようになり、伽藍の中は音声喧雜の状を呈した。そこでここらある比丘がその旨を世尊に申しあげると、二事を除いて作すべからずと、これを禁止された。その二事とは、大師 (佛) の徳を讃ずる場合と、三啓經を誦する場合とで、この二つの場合に限つてのみ吟詠の声にて作すことを聴_きされたというのである。根本有部において讃詠が用いられたのは、おそらくかよ

うなことがそのよりどころとなっているのであろう。そしてそのことは歌詠を好むインドや南方の諸民族の風尚に合致したためか、他の部派の僧伽においても用いられることになったとかんがえられる。後世のセイロン上座部において、Bhāṇavāra^④（誦誦品）が編纂せられ、やがてそれぞれの僧伽で独自の声調を有する吟詠法がおこるにいたることも充分に首肯できるのである。

ところで根本有部がとくに讃詠をおもんじたとみられる理由は、義浄があげているような、龍樹をはじめとして馬鳴、摩呾里制多、陳那、釈迦提婆（Śakyaśrībhaṭṭa）に帰せられる各作品、ならびに戒日王の作品、月官大士（Candra-gomin）の作品など、いくたのすぐれた讃頌を、前述のいわゆる大師の徳を讃ずるものとして用いたところにあるとおもわれる。そしてそのような寛大にして積極的な姿勢は、この部派が律を重んずる部派とはいふものの、またその思想学説の多くは、もちろん説一切有部のものを継承しているとはいふものの、大乘の影響を受け大乘に近づいている点が看取されるのである。いまは根本有部における讃佛思想がまた三宝崇敬というかたちであらわれている面に注目したのであるが、このことは実践教学に関心をもつものにいくたの示唆をあたえるものとかんがえられる。

註① 釈氏要覽卷中（大正五四、二八〇下）には「若今唱曲子之類也。律云。有_二五過_一。一使_二自心貪_一。二令_二他起_一著。三独処多起_二覺觀_一。四常為_二貪欲_一覆_二心_一。五令_二諸年少聞常起_一愛欲_二反_二道故_一。」と述べている。

② 四分律、説戒健度、大正二二、八一七、上一中

③ 根本説一切有部毘奈耶雜事卷四、大正二四、二二三中

④ 拙稿「南伝佛教の一樣相」大谷学報二八ノ二、四四頁